

編集室から

今年も早、ひと月が経ちました。二月の旧名「如月」について、調べると「衣を更に着る」で「きさらぎ」といい、漢字は中国の二月名「如月」を充てたという説が有力なようです。

中国読みでは「によげつ」となり、「寒い冬が終わり、春に向かって万物が動き始める時期」という意味があるそうですが、太陰暦での二月は、太陽暦の三月くらいに相当するので、によげつの意味も納得できます。「冬来たりなば、春遠からじ」という詞も浮かびます。

昨年末は感染も収まり、そろそろ…と想っていたのですが、年が変わって事態が急速に変わってきました。そんな中、荒波を縫うように県外出張を予定通り進められたのは、ほんとうに有り難いことでした。

沈静化するには集団免疫の獲得が必要で、それには人口の6割が免疫を持つ必要があると、ある専門家が言っていました。この点の真偽の程は、井垣君の今後の寄稿を待つこととして、問題は、そこへ至るプロセスです。急速に進むと重症化する患者も激増して医療が崩壊し、慎重に過ぎると人流が長く停滞して経済が崩壊する…。この舵取りこそが、非常に難しく、世界的には、国情の違いが度合いの違いとなって顕れているのかもしれません。

経済はとにかくマス（俯瞰）で観るので、重症化は「率」という数字でしかありませんが、医療は患者個人を診るので、決して「率」で割り切れる世界ではありません。ここにも、両者の思考パターンの違いが、結果や判断の断絶を生んでいるようにも思えます。

個人的には、地方を経済面も含めて再生するお手伝いをさせて頂いているため、地域経済を個々で観させて頂いているので、その断絶に痛みも伴って感じてしまいます。

春が待ち遠しいものです。（は）



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2022/02
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2022/02
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

如 月



富山湾越しに望む立山連峰
石川県七尾市にて
by hama

寄稿『COVID19はただの風邪になるのか』

サンポート高松クリニック 井垣 俊郎

私が投稿するたびに、濱さんはコメントを返してくださいます。時に力作で、私の文章より長いのではと思う事もあります。前回は「COVID19がただの風邪になる日は来ないのか？」という趣旨の質問が返ってきました。

長い目で見れば、ただの風邪になる事はほぼ間違いないと思います。歴史的に、過去の感染症が全てそうだったからです。問題は、そこまでの過程です。現時点でも、既に大きな経済的損失が出ています。感染が長引くほど、損失は膨らみます。それを防ぐ為に考え出されたのがワクチンで、接種率を上げるだけで一気に感染終息に持ち込めるはずでした。

今回のCOVID19は、敵ながら本当に見事なウィルスです。これまで、怖いのは病原性の強いウィルスだと考えられていました。しかしそうしたウィルスは、当初は犠牲が出て隔離で終息に持ち込めます。ところがCOVID19は、常には病原性が弱く無症状の感染者も多くいるウィルスです。それが感染する相手によって、突然豹変して致死的にもなります。また感染力も強いと思われたのに、無症状の人からも感染が拡がりました。これは防ぐことの難しい、厄介な特徴です。

変異もインフルエンザウィルスに比べて限定的

で、ワクチン完成でゲームオーバーと思われるかもしれませんが、しかしオミクロン株の出現で、雲行きが怪しくなってきました。常には病原性が弱そうに見えて突然豹変するという厄介な特徴を保ったまま、どこまで変異し続けるのか今のところ予測が付きません。折角膨大な手間と時間と費用を投じてワクチンを接種したのに、全てが無駄になる恐れすら出てきました。

ブレイクスルー感染という言葉は、日常会話でも定着しました。ワクチン接種を終えていても感染するのは、変異したウィルスを抗体が認識しなくなるのではなく抗体の目を盗んでしぶとく生き残る為と考えられます。殆どのブレイクスルー感染で、ウィルスは症状が出るほどには増殖しません。他の感染症でも潜伏することはあり得ますが、そうした場合はウィルス量が少ないため感染力も弱まるのが普通です。しぶとく感染して潜伏するプラス少ないウィルス量でも他人に感染するプラス予想以上に変異が多い、そして突然豹変して大暴れする。これがCOVID19の真の姿です。

こうしてみると、三回目のワクチン接種も決め手になるとは思えません。ただの風邪になる日が何時になるのか、そこまでに何を乗り越えねばならないのか、現時点では全く予想がつかなくなってきました。



【プロフィール】
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又ク又クしています。

濱の起業塾 三十四『事業運②』

前号で触れた事業運に関わると思われる「慎み」には、謙虚さと、ある種の素直さを含んでもいる。

一方で、志はブレない軸性が必要。相反する両者のバランス感覚。優れた経営者には、これがあると思う。だが実は、これが難しい。

人生は、選択の連続である。現状は、過去から連綿と積み重ねてきた己の選択の結果であると言っても過言ではあるまい。誰の意見を聞いて、誰の意見を退けるのか。選択力は、事業の命運を握るのだが、意外に個人の好悪・嗜好で決められているフシがある。特に、田舎における「名士」と呼ばれる人々においては。

これまでと異なり、急速な一丁の進歩は、都市と地方の情報格差を急速に縮めている。山間・奥地といえども、時流から切り離され

た世界を維持するのは難しい。田舎の名士が時流に敏感かつ柔軟であれば、素晴らしい。が、誠に残念ながら、往々にして全くもって理解できないことしばしばであるように感じる。彼らにいかにか心地よく、新しい事業を受け入れてもらえるか、あるいは口を出すことを謹んで頂けるか、そこを失念すると最悪、ちゃぶ台返しの刑に処せられる。一見、運とは無関係に思えるこのようなことへの配慮もまた、事業の成否に深く関わるという意味では、広義の事業運といっても良いかもしれない。

大卒・技術系しか役員になれなかった某上場企業で、初めて高卒・営業職から役員となった父は、「運も実力の内」とよく言っていた。「運」であっても、工夫と、気働きによって、好転させられることがあるという意味だろう。

今となって、父のこの言葉の深意が伝わってくる気がしている。

きただより87 弘前大学 地域社会研究会 上村 康之 『ウィスキー市場の伸びと観光拠点への期待』

1991年に石川さゆりさんが「サントリー角瓶」のCMで「ウィスキーがお好きでしょ」を歌ったが、近年はその曲を唄った男性歌手の歌声がバックに流れるショットバーで俳優の井川遥さんやカウンターに3人の男性客（俳優の田中圭さん、加瀬亮さん、カンニング竹山さん）が出演する「サントリー角ハイボール」のCMが好評のようである。これはほんの一例であるが、ウィスキーに対するイメージはだいぶ、上がってきたように思う。

経済産業省（2018年度データ）によると、酒類全体では2008年度と比較して約6%が低下している。品目ごとではビール、発泡酒、清酒、焼酎が低下しているのに対して、ウィスキー類が2.3倍のほかりキュール類、スピリッツ類などとの伸びが顕著である。また、ウィスキー類は、昨年は日本の輸出食料品としてもホタテ、牛肉に次いで3位であった（清酒も輸出額は伸びている）。

これらの理由としては、ウィスキーの世界5大ブランド（他にスコットランド、アイルランド、アメリカン、カナダディアン）・ジャパニーズウィスキーとしてのステイタスの確立と高まり、ハイボール・コークハイなどのブーム、少し高級感のある欧風レストランやショットバー（コロナ禍前までか？）などの人気などがあるのだろう。

日本のウィスキーの蒸留（溜）所は2022年1月現在で43ヶ所が稼働している。今後、稼働が開始予定の5蒸留所を加え、それを地域別にみると、中部が15（長野4、静岡3など）と突出し、次いで九州・沖縄（鹿児島3など）が9、近畿が6（兵庫3など）、関東・中国（埼玉4など）が各5、北海道・東北が各4、四国0となっている。

東北・北陸の日本海側における蒸留所の立地をみると、金龍遊佐蒸留所（山形県遊佐町）、新潟麦酒忍蒸留所（新潟市）、新潟亀田蒸留所（新潟市）、若鶴酒造三郎丸蒸留所（富山県砺波市）の4ヶ所である。遊佐蒸留所は地元山形県内の酒造メーカー9社による合弁会社、新潟麦酒はクラフトビール醸造所による創設である。亀田蒸留所は、大手印鑑販売会社による設立であり、若鶴酒造は1862年に清酒製造を開始した歴史の深い酒蔵など、日本酒メーカー、麦酒会社、異業種からの参入といろいろな形態がある。また、その参入時期も概ね2016年（平成28）以降と、近年に立地した蒸留所が多い。

日本酒どころの秋田県には、これまでウィスキー蒸留所がなかったが、地元飲食店チェーンのD社が秋田県内18自治体の100ヶ所以上から、現在の建設地である秋田市東部の小学校跡地周辺を選定し、2022年度中の完成を目指して準備を進めている。蒸留所建設費は4～5億円のうち、一部クラウドファンディングで調達し、ウィスキーを水、穀物、樽材とも秋田産でつくるというコンセプトのもと、年間2万1,000ℓの生産を予定している。構想ではウィスキー製造ののちには、秋田駅や秋田空港から車で30～40分に位置することからも、レストランを含む観光施設や宿泊施設などを設置する予定でもある。地域における蔵やワイナリーに次ぐ、新たなウィスキーによる地域づくりの拠点となることが期待されている。

『飲食業において新型コロナが残したもの(3)』 株式会社GARBAGE代表 川畠 嘉浩

今度はオミクロン株がものすごい勢いで感染拡大してますね。WHOの公式発表では重症化率はデルタ株の1/5以下ということですが、感染者率が5倍以上というデータも欧州では発表されていることを考えると医療体制の逼迫、そして緊急事態宣言の再発令もまだあるんだろうな。しかしデルタ株の猛威を奇跡的（ワクチン施策の効果と思うが何故か言い切れない医師会や分科会）に乗り越えたにも関わらず、相も変わらずゆるゆるの水際対策で結果オミクロンの拡大を許してしまう。そしてお上達は二言目には「お店でのお酒を伴う飲食の自粛・不要不急の外出は控えてください」。それしか言えんのかー!!!怒りもまさしく第六感ですが、冷静になると見えてくるものもあるのも事実。

では先月までの続きをどうぞ。

3.飲食店

そして最後に事業者側への影響である。

まずは世の中に出ている様々な数字を見てみよう。

<1>廃業社数

「帝国データバンク」が今年1月に発表した、2020年の飲食店事業者の倒産動向に関する調査結果を振り返ってみる。

帝国データバンクの発表によると、2020年の飲食店事業者の倒産件数は780件。これは、これまで過去最多となっていた2019年の732件を超える倒産件数とのこと。

業態別に倒産件数の内訳をみると、最多となったのが「酒場・ビヤホール」で全体の24.2%を占め、「中華・東洋料理店」（105件）、「西洋料理店」（100件）、「日本料理店」（79件）と続く。「喫茶店」（68件）に関しては、2000年以降で過去最多の倒産件数となっているようだ。

さらに倒産した飲食店事業者を負債額別にみると最も多かったのが「5,000万円未満」で全体の79.5%（620件）。

次いで、「5,000万円～1億円未満」（86件）、「1億円～5億円未満」（61件）と続いており、個人・零細企業が大半を占める飲食業界なら当然の数字と思われる。

<2>閉店数

次に閉店数。弊社も2020年に1店舗閉鎖、1店舗は事業売却をしました。会社をつぶさないためにアフターコロナには対応できない店は早めに撤退してスリム化+運転資金の確保というのが狙い。

しかし、傷口が広がる前に一度撤退するという選択肢のほうが賢明だったのではないかと考えてしまうこの頃。日経新聞の記事によると、新型コロナウィルスの感染拡大以降、全国の飲食店の閉店が4万5000店に上ることがNTTタウンページ（東京・港）の共同調査で分かった。感染拡大が始まった2020年1月末には約45万8000店が登録されていたが、21年8月末で41万3000店と4万5000店（1割）減った。

緊急事態宣言の発出が相次いだ5都道府県（北海道、東京、愛知、大阪、福岡）に絞ると1万6000店以上が閉店した。日本経済新聞が今年4～6月に主要外食企業557社を対象に実施した調査（有効回答311社）では、20年度の閉店数は5230店だった。

今回の日経とタウンページの共同調査の閉店数（4万5000店）の多くが大手チェーンではなく、個人店であることが分かる。後継者不在のまま売り上げ減を機に経営者が引退し、閉じる店も多い。雇用にも悪影響を及ぼす。総務省のサービス産業動向調査（速報値）によると飲食店の従業員数は7月時点で368万人。新型コロナ感染拡大前の20年3月と比べて40万人ほど減った。（つづく）

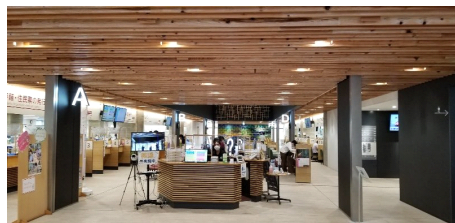
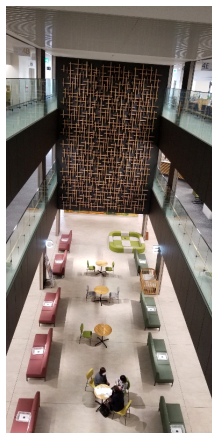
『相模の国から ～大魔神のたび～』 奄美大島への旅③2021.11/3～6
茨城県 境町 参与 溝口 久

次は車で10分ほど走ると、そこには奄美の海が広がるは大浜海浜公園がある。目の前に広がる奄美ブルーにしばし見とれる。11月に入っているが、泳ごうと思えばできないことはない。シュノーケリングにもってこいだ。海水浴場としての設備はもとよりキャンプ場も、奄美の海を知る海洋展示館も用意されている。街中から車で15分もあれば着く。特に海に沈む美しい夕日は最高だ。

自然の次は文化を知りたい。これには文化会館付属の博物館が奄美の歴史・暮らし・自然を知るにはいい。奄美の青空に映える白の建築が特徴的だ。「以前来たことあるなあ」と思い起こせば、こここそ13年間にそば体験を市民対象にしたところであった。屋外の円形広場で日差しが弱い冬であったからこそ、できた蕎麦打ちだった。当日40人もの方が来られたのには驚いた。本格的な日本蕎麦のお店はここには無いし、ましては蕎麦を打ったこともなければ食したこともない人たちだった。一人ずつ皆に体験させたいと現地に送った蕎麦粉は16kgにもなった。この日は小生が市民協働の講座もさせていただいたが、皆さん蕎麦のことは鮮明に覚えているが、講座の内容は記憶のかなたにとうに失せていたようだ。

話を今に戻す。次に向かったのが、できたてほやほやの奄美市庁舎。奄美らしさをどう意匠に組み込むかは大きな関心事だ。奄美の象徴と言えば大島紬、サンゴ礁が生み出す奄美ブルーの海かな。

その庁舎は「大島紬」をモチーフにアルミパネルの「紬スクリーン」が特徴的だ。ファサードのデザインだけでなく強い日差しへの防御や反対に光を内部に引き込む装置にもなっている。サンゴ石も足元に利用されていたり、内部吹き抜けには、紬をモチーフにしたデザインパネルがあり、さりげなく壁には田中一村の絵がある。木製の天井ルーバーもいい。「奄美らしさ」を大切にしたい奄美の人々に長く親しまれる庁舎になっていると感じさせる庁舎だ。



見学の後がいよいよ本番。ケーブルテレビ奄美・FMラジオへの出演、そして7時から講演会。いずれも静岡県小山町で手掛けた仕事「ちっちゃな町の大きな挑戦」のお話だ。

案内していただいている重信さんが進行役、二人で対話する形だ。ただ、ラジオではなく映像が伴うので、それなりの緊張感はあったが、一時間の持ち時間はあっという間に過ぎた。後に自宅に録画されたDVD送られてきたが、見てはいない。

テレビの後のFMラジオ出演には時間に余裕なく、スタジオに急いだ。ここでは、この日19時から市民交流センターでの講演の宣伝だ。10分程度の放送だからあっというまの出来事になった。

いよいよ、本日のメインイベント19時から1時間半の講演だ。テーブルにはパワーポイントをプリントアウトしたものが並び、その横に持参の静岡県産みかんを置いた。つまらない話だと思われる前に罪滅ぼしの品を用意したのだ。以前、宮城県丸森町役場での職員研修時には静岡茶の振舞いをした。

講演時には、いつも心がけていることがある。エンタティナーとして振舞い聞き手を飽きさせないことである。面白くなくてはいけないのだ。

心の準備をしている内に、コロナ禍にも関わらず次々と人が入って来られ60人までに達した。小山町で手掛けた建築や公園をその時のいきさつ、ドラマ、エピソードを交えて話していくと理由なく90分が経った。長い一日が終わった。

奄美3日目は、かねてから是非一度は行ってみたいと強く思っていた加計呂麻島（かけろまじしま）に出かけることにした。奄美大島から大島海峡を隔ててすぐ南隣にある島だ。リアス式海岸の複雑な地形の間に分布するサンゴ由来の真っ白な砂浜とコントラストをなす加計呂麻ブルーと呼ばれる青い海とが特徴的である。ところどころに集落が散在し、映画『男はつらいよ』シリーズ本作最終の第48作「男はつらいよ 寅次郎紅の花」のロケ地になっている。（つづく）

